



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年5月発行（第37号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「終末の日の復活」エレミヤ

◎証「御国への条件」E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「終末の日の復活」by エレミヤ

本日は、終末の日の復活として、終末の日に聖徒の復活が起きることを見ていきたいと思えます。

< 艱難時代の終わりに聖徒の復活がある >

聖書は艱難時代の終わり、すなわち、主が再臨される日に聖徒の復活があることを明確に語ります。以下の聖書箇所のとおりです。

“1テサ4：13-18”

この箇所を少し見てみましょう。

1テサ4:13「眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。」

このことばの意味合いは艱難時代において、殉教する人、命を失う人々が出てくるが、

それらの人々に関しては、ただ、ただ、悲しむ必要はない、との意味合いです。何故でしょうか？それは、以下のことばが答えになります。

4:14「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。」

イエスの死が、復活への通過点に過ぎなかったように、艱難時代の殉教もいわば、通過点に過ぎず、殉教者もイエスと同じように速やかな復活を得るようになるから、その死を必要以上に悲しむ必要はない、と語っているのです。

ここでは、眠った人々と関連して、イエスの死と復活が語られています。ですので、この眠った人々が単なる死んだ人ではなく、逆にイエスの様に主のことばのゆえに、殉教し、復活する人々であることがわかるのです。

ですので、私たちは、艱難時代の殉教ということに関して聖書的な見解を持たなければなりません。誰も肉体の命を失いたくはありませんが、しかし、艱難時代の殉教者は必ず、すみやかに復活し、しかももう死に影響されない栄光のからだを得るのですから、いわば得をするようなもの、いえ、えびで鯛を釣るようなぜんぜん得な結果を得るようになるのです。

4:16「主は、……天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり」

ここに書かれているように、殉教者の復活は、艱難時代の終わり、キリストの再臨のときなのです。さて、その再臨のとき、殉教せず生き残った正しい聖徒はどうなるのでしょうか？それに関しては、

4:17「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らと一しょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」と書かれています。

ですから、生き残った人々は、再臨の日に栄化され、空中に携え上げられるのです。

4:15「主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。」

ここでパウロは、復活し、栄化されることに順番があることを語ります。具体的には、死んでいる、すなわち、殉教した人が先であり、逆に艱難時代の最後まで主に忠実であるが、しかし、生き残った人はその後になることが書かれています。何故なのでしょう？

このことは、物事には大小があり、軽重があることを考えればわかります。当たり前ですが、私たちの持っているものでもっとも尊いのは私たちの命であり、その尊い命をささげて殉教した人が最優先されるのです。以下のことばのとおりです。

“ヨハネ15:13 人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。”

主を愛するがゆえに、もっとも大事なもの、自分の命をささげた人が復活するとき、第一優先される、このことは、人間的に考えても、大いに道理にかなったことです。

まとめますと、テサロニケのこの箇所では、終末の日に起きることの順番に関して、以下の

様に語っていることがわかります。

1. 終末の日に艱難時代があり、正しい聖徒は迫害される。
2. ある聖徒は殉教し、ある聖徒は最後まで生き残る。
3. 主の再臨の日に殉教した聖徒は復活する。
4. 生き残った聖徒は、栄化され、携え上げられる。

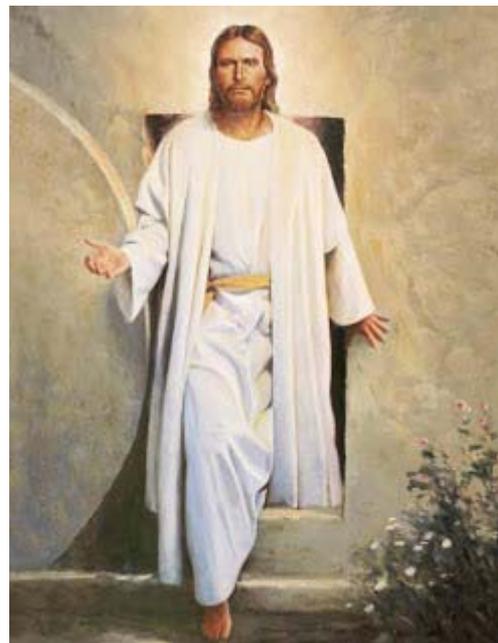
＜黙示録 1 1 章も同じ順番で聖徒の復活について語る＞

さて、黙示録 1 1 章も上記と同じ終末のストーリー、順番を語ります。このことを見ましょう。

“黙示録

11:7 そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。

11:8 彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。



キリストが復活されたように聖徒も復活する

11:9 いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめるが、その死体を墓に納めることは許さない。

11:10 地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。

11:11 三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常に恐怖に襲われた。

11:12 その時、天から大きな声がして、「ここに上ってきなさい」と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。"

この箇所を順に見ていきましょう。

11:7「そして、彼らとそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。」

彼らとは2人の預言者のことです。そして、この預言者とは、他の箇所では、「2つの燭台」と書いてあります。燭台とは、黙示録1:20では、教会をさすと書かれているので、要するに2人の預言者とは、2つの教会をさすことがわかります。そして、この2つの教会は獣により殺される、すなわち、獣の国アメリカの迫害の中で殉教します。

11:8「彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。」

彼らの死体は都、すなわち、背教の教会にさらされます。かつて、イエス・キリストは神の民、ユダの中心の都であるエルサレムで十字架につけられました。そして、その主の十字架の死はまた、一面、旧約の神の民の背教やら、冒瀆の象徴的なできごととなりました。同じ意味合いで、主と同じように2人の預言者は、新約の神の民の中心の地である、キリスト教会の真ん中で、異端扱いを受け、殉教の死を遂げるようになるでしょう。

そして、その殉教の死は、主の十字架と同じく、新約の神の民の背教、冒瀆を象徴的にあらわすできごととなるでしょう。そしてもうひとつのことが暗示されます。

かつての日、キリストの十字架の死は、神が旧約の民をついに見捨てる契機の時、ターニングポイントとなりました。その日を契機に神のその民へのあわれみは打ち切られ、神の怒りはその民に対して燃え上がり、結果、ユダは、ローマにより、攻撃され、100万人を超える多くの民が滅ぼされました。同じ意味合いで、終末の日のこの2人の預言者（教会）の殉教は、神の冒瀆の新約の神の民へのあわれみを打ち切らせ、すさまじい、神の裁きをスタートさせるきっかけとなるでしょう。その日、反キリストを拝するようになった惑わされたクリスチャンは、正しいクリスチャンへの迫害を行うようになるでしょうが、その先に待つのはこのように、神のすさまじい怒りの裁きなのです。

11:9「いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめるが、その死体を墓に納めることは許さない。」

3日半という半端な期間が書かれていますが、これは、艱難時代の3年半をさす別の表現です。艱難時代の3年半に関しては、1260日、42ヶ月、ひとときとふたときと半時など色々表現があります。ここでは、1週=7年だからすなわち、その半分の3日半=3年半ということで、3日半とは、3年半をさす別の表現なのです。

11:11「三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常に恐怖に襲われた。」

ここに書かれている、「彼らが立ち上がった」ことこそ、復活なのです。ですので、この箇所から明らかなように、いわゆる第一の復活にあずかる人とは、艱難時代の殉教者なのです。クリスチャンだから、誰でも彼でも第一の復活にあずかるわけではありません。

11:12「その時、天から大きな声がして、「ここに乗ってきなさい」と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。」

ここに殉教者が復活してさらに天に携えられること、すなわち、携挙されることが描かれています。ですのでこの箇所でもわかるように、聖書は明らかに、携挙が艱難時代の後に起きることを語るのです。ですから、巷に広がる艱難前携挙だの中だのの教理はまったく聖書に基づかない嘘っぱちだということがわかります。

またここを見てわかることは、すべての人が携挙されるわけではないことです。逆にその日携挙される人々は、殉教者や、最後まで忠実だった人であることがわかります。ですから、すべてのクリスチャンが艱難に会わず携挙されるとする、今のクリスチャンが妄信している終末教理は聖書にも、キリストの意図にも外れた、的外れなものです。

この黙示録の箇所でも前のテサロニケの箇所と同じく、復活についての順番を以下の様に述べています。

1. 終末の日に艱難時代があり、正しい聖徒(預言者)は迫害される。
2. ある聖徒は殉教する。
3. 主の再臨の日に殉教した聖徒は復活する。
4. 復活した聖徒は天に、携え上げられる。

この2つの聖書箇所が語る終末のストーリー、シナリオ、順番はまったく同じものであり、確かに聖書が携挙に関して、同じ順番を語っていることがわかるのです。聖書に基づかない偽りの教理に別れを告げ、認識を正しくしましょう。

＜復活する人々の歩みの順番は主の公生涯と同じ＞

さて、ひとつ注目すべきことがあります。これらの殉教者の歩みはまた、主の公生涯の歩

みとまったく同じ順番の歩みなのです。すなわち、主の公生涯は、以下のとおりです。

* 3年半の艱難に満ちた伝道→十字架の殉教→復活→昇天。

同じく終末の正しい聖徒の歩みは、以下のとおりです。

* 3年半の艱難時代においても預言者的な働きを続け→殉教→復活→昇天(携挙)。

これらの2者の歩みは、まったく同じ歩みなのです。この事実を通して教えられることは何でしょうか？それは、艱難時代の後の復活、すなわち、第一の復活にあずかる人とは、主の弟子として、主と同じ歩みをし、主のために苦難を受ける人々だということです。そして、それは以下のことばと合致します。

ローマ8:17「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために**苦難**をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。」

ですから、私たちが艱難時代において、キリストと同じように、神のことばのため、真理のため、苦難を受けるなら、結果、キリストともなる栄光を受け、また、復活、栄化の恵みにあずかれる、そう理解できるのです。

しつこいようですが、その点、艱難前、中携挙説が提唱していることは、キリストのための苦難などまったく無縁な、お気楽クリスチャンの歩みです。かつて、「あなた作る人、私食べる人」というCMが非難されたことがありました。その伝でいうなら、艱難前携挙説とは、十字架で苦しむ主に対して、「あなた苦しむ人、私挙げられる人」などと自分はどこまでも楽な道を選ぶと宣言しているようで、とても主に喜ばれる教えと思われません。まして、真に聖徒の復活につながる教理とはとても思えないのです。

<迫害者は地球が燃え尽きる日にも滅びる>

さて、黙示録を見る限り、殉教したり、迫害される人は大変そうだし、逆にさっさと反キリストを拜む人は楽そうですが、そうでもありません。以前書きましたように、世の終わりとはこの世の舞台である太陽や、地球の終わりの時であり、太陽も地球も燃え尽きて消滅してしまうからです。以下のことばのとおりです。

“2ペテロ3:7 しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。”

このように、終末の日は、今の太陽、地球、天体も燃え尽きてしまい、文字通り、この世の宇宙が終わる日であり、誰ひとり今の肉体を持つては通過できない日なのです。

しかし、艱難時代を経て、主に忠実な聖徒たちは、復活し、栄化され、新しいからだを持ち、新しい神の国に入るようになります。このことをたとえていえば、こういうことでしょうか。毛虫は、木の上をもそもそ歩くだけなので、すぐ敵に食べられてしまいますが、しかし、変身して蝶になると、自由に空を飛べ、敵から逃れるようになります。同じように、その日、復活の体、栄化された人々は災いを逃れるのです。

それでは、その日には、それ以外の人はどうなるのでしょうか？それは、上記のことばどおり、その日、太陽、地球が燃え尽きる日は、不敬虔な人々にとり、裁きの日、火の裁きの日となるのです。そして、太陽や地球が燃え尽きるその日、彼ら、不敬虔な人々の肉体のからだは、当然、燃え尽きてしまうでしょう。まさに、ソドム、ゴモラの裁きの日の再来となるのです。

ですので、終末の艱難時代を経るクリスチャンに関して、正しい選択はたった一つしかありません。それは、艱難時代を経ても主に忠実であり続け、その結果、体の栄化、携挙を勝ち取ることです。このことを知しましょう。

<何故艱難時代が来るのか？>

ところでというか、何故主は終末の日に艱難時代を用意しておられるのでしょうか？あまり苦難を好まない我々には、望ましくない日かもしれません。聖書はその日に関して以下の様に述べます。

“黙示録3:10 忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。”

ここでは、艱難時代を「地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時」と呼んでいます。このことばから理解できることは、その日はすべてのクリスチャンをふるいかけ、真に神の国に入るべき人かどうか、より分けられる日だということです。主の初降臨の3年半の公生涯のときもまさにその様な時でした。この期間を通して、キリストの話を聞いた多くの群集はふるいかけられ結果、離れていき、逆にキリストを異端扱いする人々さえ現れました。ふるわれて、最後まで残ったのは、12弟子をはじめとしたほんの少数の人々でした。同じようなよりわけが、終末の3年半の艱難時代を通して起こるのでしょうか。

—以上—



携挙の日は近い

「御国への条件」 E3

「天の御国って、いったい誰が入れるのだろう？」と、最近改めて考えてみる機会が与えられました。たしかに教理や歩みの面で正しく学ぶことは大事けれども、果たしてそれだけで本当にいいのだろうか？と思いました。

そんなことを祈りながら考えていましたら、ある人の証を思い出しました。かつて何かの本か雑誌で目にした文章でした。その方は外国に住む年配の婦人で毎日5章ずつ聖書を読み、お祈りにもある程度の時間をきちんと割いていたそうです。もちろん毎週の礼拝にも出席していました。恐らく奉仕もしていたと思います。だから自分は死んだら当然、天国へ行けると思っていたそうです。

ところがある日、夢を見たそうです。どんな夢だったか？と言うと、そこにはイエス様と婦人がおられて、このように言われたそうです。「あなたは天国に行けない」と。驚きのあまり彼女は、「なぜですか？」と、たずねたそうです。すると、「たしかにあなたは礼拝にも行っているし聖書も読んでいるし、祈ってもいる。でも、私と共に生きなかった」と言われたそうです。とてもショックを受けた彼女ですが、今一度、御自身を振り返って見たそうです。「ああ、たしかにおっしゃる通りだ」と。そして、直ちに悔い改めることにしたそうです。

さて、少し考えてみたいと思うのです。彼女が見た夢が神様からのものだということを前提に話をさせていたきたいと思います。毎日聖書を読み、お祈りをし、奉仕も行っているというのは、ある意味、弟子の訓練に等しいことをこの婦人はされているのです。私たちクリスチャンの視点から見たら、彼女の歩みは模範のようにさえ見えます。また、こういったことは、ぜひ見習っていきたいと思います。しかし、天国に入れないとイエス様に言われてしまったのです。婦人の問題は、「私と共に生きなかった」ということですが、これ

はいったい何を言われているのでしょうか？

私の想像なので、ピッタリ当たっているかどうかは分かりませんが、彼女の場合、もしかすると、神様の御心を行っていなかったのでは？と、思います。聖書にも、「わたしに向かって主よ、主よ、と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父の御心を行う者が入るのです」と書かれています。教理や知識において、この婦人は得るべきものを得ていたのかも知れませんが、唯一、実践することに欠如していたのでは？と、思います。

御心を行わないことに関連して、パリサイ人のことが挙げられます。イエス様は彼らについて、このように言われています。

「ですから、彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい。けれども、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うことは言うが、実行しないからです。」と。そして、他の箇所では、

「おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。」とも言われています。要は、御国を受け継がないと言われているのです。

なぜか？「**彼らがあなたがたに言うことはみな、行い、守りなさい**」と書かれているように、教えは良かったのでしょうか。また、彼らは聖書の専門家であり、今で言う牧師や教師の立場です。ゆえに聖書をよく読み、お祈りをし、神の働きをし、いわば弟子の歩みをしてきた人たちです。しかし、そういう人たちに対して、イエス様ははっきりと「ゲヘナの刑罰に入るぞ！」と、言われているのです。弟子として訓練をし、歩みをし、働きをしている、ではあっても、御国を受け継がない人たちがいるということが分かります。少し、厳しい言

い方ではありますが、神様の前に、御心を行っていないと見なされてしまったら、それっきりなのです。ですので、御心を行うかどうか？と、言うのは、私たちが思っている以上に、神様の前には大事なことなのだと思います。繰り返して言いますが、御心を行うか否か？によって、後の世における結末が、天と地ほどの差になることが理解できます。

このことは、レムナントキリスト教会のメッセージでも言われていることですが、「御言葉は行って、なんぼのもの」なのです。なぜ、そんなことが言えるのかと言うと、祈りを通して御言葉を実践してみれば、イエス様の苦難や痛みを多少なりとも理解するようになるからです。苦難や苦痛を通して、イエス様と生きることになるのです。少し辛辣な言い方で恐縮なのですが、御心を行うがゆえの苦難や苦痛が皆無というのなら、イエス様と共に生きていたとは言えないのでは？と、思います。十字架を負っていないからです。そうだとするならば、当時のパリサイ人や律法学者のように、最悪、イエス様を敵に回すこととなります。ローマ人への手紙に、「もし子どもであるなら、相続人もあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」と書いてあるように、キリストと苦難を共にするならば御国を受け継ぎます。でも、そうでないならば、受け継がない可能性があります。そのあたりのことは、きちんと理解しておきたいとします。

重ねて申し上げるようですが、御心を行わない、つまり御言葉を実践しないならば、苦しみや困難とは、おおよそ無縁でしょう。でも、このことにはまったくポイントが無いことは、よくよくとらえておいたほうがよいと思います。たしかに救いは恵みによるのであって、行いではないとおっしゃるかも知れません。そのことは、聖書に書かれているので、それも一面の真理ではあります。しかし、ヤコブ書においては、「**信仰も、もし**

行いがないなら、それだけでは死んだものです」とか「ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます」(ヤコブ書 2:17, 1:27)とされていますので、行いも必須だと思えます。

また、御心を行うことに関してですが、要はこどものように、受けた御教えを何でも素直に「はい」と聞いて、それをただ、聖霊の力によって行うだけのことです。神様が言われることに何も異を唱えずに、素直に受け入れて実践していくことです。そういう人は、「**その行いによって祝福されます**」とあるように、神様から祝福を受けます。たとえば、あなたが会社の社長で従業員が何人かいるとして、命じたことを何でもその通りにこなしてくれる社員の人にはどこまでも優遇したいと思われませんか。給料をアップしたり、昇格したりもするでしょう。でも、何も言うことを聞かない人に対しては、減給や降格を考えるのではないのでしょうか？あるいは、辞めてもらいたいと思うのではないのでしょうか？神様も同じだと思います。どんなことであっても、神様が命じていることを素直に受け止めて行っていく人と後の世を一緒に過ごしたいと思われていると思います。反対にそうでない人とは、永遠に決別したいと思われているのではないのでしょうか？

正しく教理や知識を得ること、それはそれで尊いことですし、大事なことではありますが、それはそれであって、やはり“行い”も不可欠であるという点は、きっちり押さえておきたいとします。黙示録にも、「**そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。**」とあります。「**行いに応じてさばかれた**」の言葉に語りかけを感じるのですが、このことは、それぞれの行いについて、御言葉によってさばかれるということを言われていると思います。ゆえに神様の前に絶え

ず恐れをもって歩いていきたいと思ひます。私自身も人様のことをとやかに言える立場ではないですが、もしかすると今の時代、御心を行っていないために多くのクリスチャンの永遠の命が危ないのでは？ゆえに、主からこのような示しが与えられたのではないかと思ひます。少なくとも、私はこのことをまじめに受け止めていきたいと思ひます。また、御心を行っているかどうか、祈りや御言葉によって絶えず点検していきたいと思ひます。箴言の御言葉にも、「**自分のいのち**

を守る者は自分の道を監視する。」と書かれていますので。とても貴重な語りかけを受けたように思ひましたので、証をさせていただきました。いつも大切なことを語ってくださる神様に栄光と誉れがありますように。主に感謝して。

—以上—

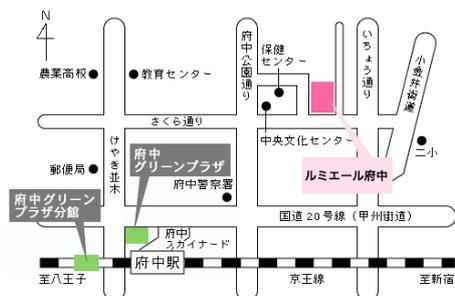
<お知らせコーナー>

- レムナントキリスト教会日曜礼拝：

午前:10:30-12:30, 午後 14:00-16:00

場所：東京、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館(tel 042-360-3311)

場所の url: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



- 「エレミヤの部屋」終末預言解釈 HP （「エレミヤの部屋」で検索下さい）

黙示録、ダニエル書等、あらゆる終末預言に関する解釈を掲載しています。

- 「角笛」終末の警告 HP （「角笛」で検索下さい）

アメリカキリスト教会の背教の実態、悪霊のリバイバルなど、多数の終末関連の翻訳記事あり。

- 第 28 回黙示録セミナーby エレミヤ

黙示録、ダニエル書等終末に関するトピックを解説するセミナー。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館講習室(7F) 場所は上記。

日時: 2013 年 5 月 19 日(日)PM6:00-8:30

費用:入場無料、ただしテキスト代 1000 円(当日徴収)

定員:20 名(先着申し込み順。満員しだい締切り)

主催:レムナントキリスト教会(tel 042-306-5002)

申し込み:メールもしくは fax で「名前、住所」記載の上、セミナー参加希望と申し込みください。

Fax 020-4623-5255 e-mail: truth216@nifty.com